

# 大和市「厚木基地」を視察して

岩国市議会議員 渡 吉弘

## 1. 大和市の概要

大和市は、人口約 21 万人、神奈川県を中心に位置し、横浜、町田、相模原、藤沢、海老名、座間、綾瀬の各市に隣接する、都心から 40km 圏内にある、南北に細長い街である。

面積は約 27? の小さなまちだが、東急田園都市線・相模鉄道・小田急という 3 つの鉄道が東西南北に走り、東京へは 1 時間以内、横浜へも 20 分で行くことが可能な位置にある。

また、道路も国道 16 号線、246 号線及び 467 号線、県道 4 線が縦横に走り、東名高速道路横浜町田インターチェンジにも近く、交通の利便性に恵まれているとても便利な街である。

## 2. 厚木基地の影響と市の対応について



厚木基地の全貌

### (1) 厚木基地の沿革

約 507 万平方メートルの厚木基地は、大和市の南西部に位置し、大和市・綾瀬市・海老名市の 3 市にまたがって所在している。

このような中に所在する厚木基地は、全国的にも稀な「人口過密都市の中にある軍用飛行場」であり、基地周辺の住民のみならず、広域にわたる多くの方達の日常生活に様々な影響を及ぼしている。

基地の歴史は、昭和 13 年に旧日本軍の航空基地として始まり、昭和 16 年には帝都防衛海軍基地として使用開始された。

その後、昭和 20 年の終戦からは連合軍の一員であった米軍に接收され、昭和 25 年には米陸軍から米海軍に移管された。以来、米第 7 艦隊の後方支援基地として現在に至っている。(マッカーサー元帥が降り立った基地として有名である。)

昭和 46 年には、基地の一部が海上自衛隊に移管され、日米共同管理体制が採られるようになった。これにより米海軍は「厚木航空施設」、海上自衛隊は「厚木航空基地」として、所謂「日米共同使用の基地」として現在に至っている。

滑走路の大半は綾瀬市に所在するが、滑走路の離発着の延長線上の大部分が大和市(神奈川県下第 2 位の人口が密集都市である。)に所在するため、騒



音の被害は 3 市の中で、大和市がもっとも深刻である。

岩国に配備されようとしている F A - 1 8

厚木基地に飛来するジェット機の大部分は、横須賀を母港とする米空母キティホークの艦載機である。艦載機は、空母の横須賀入港前に厚木基地に飛来し、出港後に洋上の空母へ帰艦する。



米海軍 電子戦機 EA-6B

空母入港中、艦載機が厚木基地を拠点に訓練飛行を行うため、飛行騒音による基地周辺の生活環境は極度に悪化する。

また、昭和 57 年 2 月からこれまでの訓練飛行に夜間連続離着陸訓練（NLP）が加わり、発生する騒音は受忍限度をはるかに超えた激しいものとなった。

これらの騒音被害について、平成 7 年 12 月の第一次厚木基地騒音公害訴訟の差し戻し審判決が言い渡され、国に対し損害賠償の支払いが命じられた。

大和市では、基地の周辺の 5 個所に騒音測定機を設置して 24 時間体制での測定を行い、その結果を基に、米軍や国に騒音被害の解消を強く訴えている。その測定回数（70dB 5 秒以上）は年間約 28000 回におよび、最高音は 120 dB を記録した。苦情の件数も大和市中で年間 1750 回、神奈川県では 5000 件を超えるということである。

## （ 2 ）大和市と厚木基地との関係について

応対して下さった議長や基地対策課のお話では「大和市は、日米安保は否定しないが、基地の諸障害は最大限取り除くべきとの姿勢で臨んでいる。」とか。

現在も人口が微増している大和市にとって基地がもたらす騒音はとうてい許し難く、昭和 39 年 9 月の日米合同委員会の合意で設けられた時間制限（22 時～ 6 時禁止）と飛行方法の制限（低空飛行・曲芸飛行等の禁止）も適用除外項目が多いので、改善するよう要望している。

## （ 3 ）大和市の基地問題への取り組み

・ **今日的取り組み**として、NLP の硫黄島全面移転 基地開放日のデモフライトの中止を申し入れ、現在実現している。

・ **中期的取り組み**として、基地機能の移転縮小として、空母キティホークの横須賀母港化反対求めている。キティホークは 2008 年に退役する予定だが、米軍は日本側が原子力空母反対が根強いことを理解しているため、一般動力エンジンのジョン・F・ケネディを改修をし、2018 年まで現役を続行する可能性も示唆している。（その場合はキティホークがジョン・F・ケネディに替わる可能性もあるということである。）

・ **長期的取り組み**として、基地の全面返還（基地が基地でなくなることを求める）しかし、全面返還後の土地利用計画の策定には至っていないのが現状である。

## （ 4 ）岩国基地との関係について

大和市議会議長は、「新聞報道などで、米軍再編について取りざたされているが、我々は厚木基地機能を岩国基地に移転することを支持してはいない。あくまで、NLP について硫黄島



横須賀を母港とするキティホーク

への全面移転を求めていくつもりである。」とおっしゃった。

### 3. おわりに

視察を終えて後に、事務局のお計らいで基地の周りを車で一周した。岩国基地のように河口の三角州に位置しているのとは異なり、滑走路の周りには人家が密集している。

丁度、キティホークが横須賀に入港中で、艦載機が訓練のため離発着を繰り返していた。滑走路の延長線上を車で走っているときに、我々の上空をジェット機が通過し騒音がモロに伝わってくる。まるで何も聞こえない状態が続いた。

大和市は東京のベッドタウン化しているため、市民の多くは首都圏へ通勤している。従って直接的に基地経済に依存している人は少ないということである。(自衛隊員や基地従業員の多くは隣の綾瀬市に多く住んでいるということである。)

岩国市との比較でいえば、大和市は「米軍基地」対して岩国よりも厳しい態度で臨んでいることが、説明からもよくわかった。

防音工事が年に 80 億円以上もあり、経済の基地依存化ということも考えられないことはないが、大和市としては経済対策としての「防音工事」とは捉えてはいないようだ。

米軍再編問題で、厚木基地の岩国移転が取りざたされているが、これなどどうも許されるものではない。経済界などには、NLP受け入れを景気浮揚策にしようと考えていらっしゃる方が居られるようであるが、言語道断である。

我々は、まずNLPが通常の飛行訓練とは異なることを認識すべきである。そうなれば自ずから、民間空港の問題と厚木基地受け入れとNLP誘致が相矛盾した考えであることが容易に理解できるであろう。

岩国をどのような「まち」にしたいか、或いはどのような「まち」であるべきかを市民は真剣に考えねばならない時期がそこまで来ているようである。

母なる川・錦川と錦帯橋を中心とする豊かな自然と文化の香るまちとしての存在を後世に残すことが我々の責務であることを再確認した、有意義な視察であった。 以上

2005.3.31